

氏名（本籍）	宮前 光宏
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	博乙第 2974 号
学位授与年月	令和 2 年 11 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	社交不安と視覚的注意処理の関連： 注意課題を用いた基礎的および応用的検討

主査	筑波大学教授	博士（心理学）	沢宮 容子
副査	筑波大学准教授	博士（人間科学）	青木 佐奈枝
副査	筑波大学助教	博士（心理学）	大谷 保和
副査	法政大学教授	博士（学術）	望月 聡

論文の内容の要旨

宮前光宏氏の博士学位論文は、注意機能の観点から社交不安の作用機序の解明および介入方法の開発を目指した一連の基礎的研究ならびに応用研究からなる。その要旨は以下のとおりである。

（目的）社交不安とは、「現実あるいは想像上の対人関係において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」と定義される。社交不安の発生および維持の機序を説明する代表的な心理学モデルには Clark and Wells (1995) と Rapee and Heimberg (1997) があるが、本論文の著者は、両モデルにおいて内的・外的手がかりに対する注意の向け方が社交不安の発生および維持に影響を与えていると仮定されている点に着目し、注意機能の観点から社交不安の作用機序の解明および効果的な介入方法の開発の一助となる研究を行うこと、研究 1 から研究 3 では、高社交不安者の注意バイアスの特徴を検証する基礎的知見を得ること、研究 4 ではそれらの結果を踏まえた注意バイアス研究の臨床応用の一例として予備的検証を行うことが目的とされた。

（方法）著者は、大学生・大学院生を対象とし研究 1 から研究 4 までの実験を行っている。研究 1 では、注意の定位促進および注意の解放困難を visual search task を用いて、研究 2 では gap/overlap task、ならびに注意制御能力を測定する position Stroop test を合わせて実施することで注意バイアスと注意制御能力の関連も同時に検討している。研究 1・研究 2 では表情刺激を用いることで、社交不安に特徴的な注意バイアスを検出することを試みている。研究 3 では、社交不安と注意ネットワークの関連を Attentional Network Test-Interaction (ANT-I) を用いて探索的に検討している。ANT-I とは、手がかり刺激およびターゲット刺激の各条件の組み合わせを操作することで 3 つの注意ネットワーク (alerting network：安静状態から特定の認知処理を円滑に行える準備状態を作って維持する；

orienting network : 特定の刺激に対して注意の定位・シフト・解放を行う ; executive control network : ターゲット刺激に対して適切に反応できるようにディストラクタからの干渉を抑制する) の機能を1つの課題で測定することができる課題となっている。研究4では介入的実験が行われ、感情価を伴わない刺激を用いた、dot probe task を援用した attention bias modification (ABM) によって、社交不安症状および注意バイアスが変容するかが探索的に検討されている。高社交不安者は、顕在性は高いが高感情価を伴わない図形刺激に対しても注意バイアスを有する、という先行研究の知見を踏まえ、顕在性の高い図形刺激に対する注意バイアスが dot probe task を援用した ABM によって変容し、結果として社交不安症状が低減するかどうか探索的に検討されている。

(結果) 研究1では、群間比較(社交不安の高低に関する比較)および群内比較(表情刺激間の比較)のいずれにおいても注意バイアスは示されなかった。しかし高社交不安者は低社交不安者と比べて全般的に平均反応時間が長い傾向があることが示された。表情刺激の種類判別課題に関して、高社交不安者は低社交不安者と比べて、呈示されたターゲット刺激の種類判別においてより正確である傾向が示され、むしろ特定の解釈バイアスは示されなかったことが述べられている。研究2では、高社交不安者の怒り表情に対する注意の解放困難は注意処理過程の比較的後期(呈示時間 1000ms)に生じることが明らかにされた。嫌悪表情においては同様の結果は得られず、怒り表情と嫌悪表情では注意処理の過程が異なる可能性を指摘している。社交不安と注意制御能力の関連に関しては、高社交不安者は注意制御能力が低いわけではなく、むしろ誤反応数の少なさという点においては優れている可能性を指摘している。研究3では、社交不安は orienting network 機能と有意な負の相関を示し、高社交不安者においては感情価を含まない刺激に対して注意処理機能が低下している可能性を、また、反応時間を従属変数とした分散分析の結果から、高社交不安者は、低社交不安者と比べて、アラート音により準備状態を形成させられた状態で比較的認知的負荷の高い課題を行う場合に、反応時間が長くなる傾向が見られたことを述べている。研究4では、高社交不安者において、顕在性の高い刺激に対する注意の定位促進という注意バイアスは示されたものの、社交不安の低減効果は示されないことを明らかにしている。

(考察) 以上の結果から著者は、高社交不安者に特徴的な注意バイアスの解明という観点では、高社交不安者は社会的脅威刺激からの注意の解放困難という注意バイアスを有する可能性があること、高社交不安者において特徴的な注意バイアスは必ずしも感情価を伴う刺激のみではなく、感情価を伴わない刺激に対しても生じうることを示したとした。また、より有効な治療介入の開発の一助という観点においては、高社交不安者は顕在性の高い図形に対する注意の定位促進という注意バイアスを有すること、本研究で実施した ABM では社交不安の低減および注意バイアスの変容は生じず、訓練法の修正および ABM の作用機序に関する再検討の必要性が示されたと考察している。

審査の結果の要旨

(批評)

社交不安者の注意バイアスに関しては多くの指摘が既になされているが、実証的な検討は多くない。著者の研究でなされた、表情刺激を組み込んだ visual search task、gap/overlap task、さらに感情価を伴わない ANT-I による実験パラダイムによって得られた新たな知見は、社交不安の発生や維持に係る注意機能を明らかにするうえで学術的に重要な知見であると評価できる。また、ABM に関しては臨床実践につながる本研究の成果を踏まえたさらなる研究が望まれるところであるが、その端緒となる知見を

得ている点は評価できる。

令和2年9月17日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第11条を適用し免除とした。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。